

浮寝

松岡隆子

水落つる音のいよいよ冬に入る
人思へば心ぬくもる石露の花
誰待つとなく山茶花の散るあたり
ほどほどに離れて鴨の浮寝かな
何となく浮寝の数をかぞへみて
浮寝より一羽しづかに離れゆく
蟪蛄の枯れゆく斧を揃へけり

悼・長沼三津夫様

悲しみの胸に碎けて冬怒濤
月明の雪嶺あをき悼みかな
寒鯉となるべく水に沈みけり
帰り花一つ二つのよかりける
通過駅五つ目あたり時雨けり

久しぶりに浜離宮庭園を訪ねた。冬風の池は和かな日差しに包まれていて水鳥が静かに浮寝をしていた。二十羽近くは居ただろうか。散らばるでなく固まるでなく、それぞれに程よい間隔をあけて漂っていた。水鳥たちも密を気にしているのかもしれないと思った。二〇二〇年を代表する言葉は「密」と発表された。その理由の一つに「大切な人との関係が密接になったこと」とあった。

十二月七日長沼三津夫さんが亡くなられた。「朝」の発展に尽くされ「葉」の創刊にも力を貸してくださった大切な方だった。心よりご冥福をお祈りします。